

当院での体外受精初回実施者のその後の帰結に関する検討

医療法人社団 徐クリニックARTセンター
清須知栄子 伊藤真理 中塚愛 徐東舜

■【目的】

近年、日本において体外受精での出産が増加している。この状況を踏まえ、当院にて体外受精を開始した患者が、その後どのような結果に至っているかを統計的に分析した。方法：体外受精開始後の採卵や移植後の帰結を後方視的に分析した。採卵4回以内で出産に至らず治療中断した症例をdrop outとした。採卵開始時の年齢で7グループ（29歳以下、30～34歳、35～37歳、38～39歳、40歳、41～42歳、43歳以上）に分類し、分析した。

■【対象】

2010年から2012年に当院で体外受精を開始した患者579症例のうち、drop outをした111症例を除いた468症例を対象とした。

■【結果】

全体の出生率は79.9%（374/468）、drop out率は19.2%（111/579）であった。出生374症例中、体外受精：361症例、タイミング：12症例、AIH：1症例であった。出生率の年齢別での分析では、29歳以下：97.9%（47/48）、30歳～34歳：96.6%（144/149）、35歳～37歳：86.0%（104/121）、38歳～39歳：75.0%（51/68）、40歳～42歳：45.6%（26/57）、43歳以上：8.0%（2/25）であった。drop out率の年齢別での分析では、29歳以下：7.7%（4/52）、30歳～34歳：9.7%（16/165）、35歳～37歳：18.2%（27/148）、38歳～39歳：24.4%（22/90）、40歳～42歳：36.7%（33/90）、43歳以上：26.5%（9/34）であった。

■【結論】

- ・35歳未満は、drop outしなければ95%以上が出産に至っている。
- ・出生率は35歳以降より徐々に低下し、40歳以降は著明に低下した。
- ・AMH値が高くなるにつれ、出生率は増加した。（年齢が若ければ、AMH値が低値でも相応の出生率が得られた。）
- ・採卵個数が増加するにつれ、出生率は増加した。（年齢が若ければ採卵個数が少なくても相応の出生率となっている。全体で50%以上の出生率を求めるなら、採卵個数は11個以上必要か。）
- ・drop out率は、出生率とは逆に35歳以降は増加した。

出産した症例の平均採卵回数は、29歳以下：1.5±1.1回（68/47）、30歳～34歳：1.8±1.9回（254/144）、35歳～37歳：2.2±2.2回（227/104）、38歳～39歳：2.2±2.2回（111/51）、40歳～42歳：2.0±1.5回（53/26）、43歳以上：2.0±0.0回（4/2）であった。

	タイミング出産（12症例）	AIH出産（1例）
29歳以下	2	0
30歳～34歳	2	0
35歳～37歳	4	0
38歳～39歳	2	1
40歳～42歳	1	0
43歳以上	1	0